

白金葭

4月号

第97号



平成31年4月発行



定例句会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

光 みち

五月五日（日）10:30～16:00 蘆花恒春園吟行句会

五月十七日（金）第五正午～二時..当季雜詠五句

六月十五日（金）第四正午～二時..当季雜詠五句

七月十九日（金）第五正午～二時..蓮見船吟行五句

四月例会句会報（'19/4/19 当季雜詠 10名欠3）

光成高志

てらくと回転ドラム畦を塗る

ゆさくと揺れ須臾にして花吹雪

帰り来る靴がだぶぐ 新入生

大いなる春の夕日の潤みをり

連翹の角を曲がつて耕耘機

佐藤宏之助

閑伽井より溢れて蝌蚪の水となる

はなびらを払ひ晶子の歌碑を読む

監獄の壁に燕が巣を造る

山門を銷し牡丹の香を封ず

看護婦に抱き起されて牡丹見る

水遣つて茎立ちの丈愉しめり
沢庵に貼りつく落花いたゞきぬ

ムンクには馬驅く絵あり春疾風

翅閉じて揺れる蝶はイヤリング

彼岸に観るからくり劇の「蜘蛛の糸」

中川素子

信玄のゆかりの寺や鐘かすむ

ハンガーを畦へる鳩受難節

信玄袋開く轡りの樹下に

ライダーにかこまるる夜や花の宿

畠中の一本桜吹雪きけり

武者昭七

立春の空駆け抜けよ群雀

天山に風猛るらし黄砂飛ぶ

夏山踏む乙女らの髪汗光る

足もとに白き花咲く浅き春

落花踏む音さくさくと春の寺

浅野正美

御手あげて待ち惚けなり甘茶仏

磯目健二一

諸葛菜毎年同じ場所に咲く

初物の筍ご飯木の芽のせ

お花見に車椅子にて参加の友

母見舞う日に日に肥える庭の梅

花吹雪両手つきあげつかみとる

田宮敦子

もつこうばら咲く派出所で道尋ね

桜咲き猫ニヤアニヤアと寄り來たる

引き継ぎの仕事を終えて花見酒

まんさくや議員選挙の投票日

木々芽吹き瑞牆山みずがきやまで子に抜かれ

松村幸一

花桃や枝垂れ隙間風過ぎる

狭けれど花の庭なり春惜しむ

白髪の和尚の木魚仏生会

石楠花や安達太良の空智恵子抄

花吹雪甘茶のごとく老いの身に

飯田孝二

父の倍生きて蛙の目借時

遅き日の水際たはむ観覽車

神馬の片耳返す胡蝶かな

口口に目鼻押し退け巣の燕

鷹鳩と化して喰ひぬ豆鉄砲

さう言へば鬱のたんぽぼ見当らず

欠伸せる写真うれしく虚子忌かな

花見酒元号四つ目間に合つて

脱ぎかけて時の止まれる竹の皮

増田陽一

大鷹銳声鴉喉声榛の散る

大鷹睦み樹上に白き十字なす

鷹啼けば谷渡りにてうぐひすも

轉るや殻の内なるかたつむり

この橋に鳩は籠らず柳絮とぶ

武者正子

店先に浅蜊見つけて触れてみる

友を訪う心はやれば花色めぐ

声荒く尾長とびたち風光る

名も知らぬ地を這う草のおもしろく

背に荷物花吹く風にゆさとゆれ

一句鑑賞

店先にあさり見つけて触れてみる

光成高志

正子

今は小売店が減つて、スーパー・マーケットなどではパ

ソクされているけれども、昔は魚屋の店先で水に浸けて浅蜊が売られていた。それに触れてみることが出来たというわけです。この行動に微妙な面白さがあります。何故って説明し難いけれども、敢えて言えば、蜆より大きく蛤より小さく色も特色無く普通であるし、淡水中で潮を吹く浅蜊は生きも見えるしなんと言つても庶民的な貝ですからと、説明しているうちに掲句のいきが逃げていくようです。

天山に風猛るらし黄砂飛ぶ

昭七

岑参 「胡茄の歌／願真卿の使いして河隴に赴くを送る」

君不聞胡笳声最悲 君聞かずや胡笳の声最も悲しきを
紫髯綠眼胡人吹 紫髯綠眼しざんりょくがんの胡人吹く
吹之一曲猶未了 之を吹いて一曲猶お未だ了らざるに
愁殺樓蘭征戍兒 愁殺す樓蘭征戍せいじゅの兒こ
涼秋八月蕭関道 涼秋八月蕭關しょうかんの道

北風吹断天山草 北風吹断す天山の草
崑崙山南月欲斜 崑崙山南月斜めならんと欲す
胡人向月吹胡笳 胡人月に向かつて胡笳を吹く
胡笳怨兮將送君 胡笳の怨み將に君を送らんとす

秦山遙望隴山雲 秦山遙かに望む隴山の雲
邊城夜夜多愁夢 边城夜夜秋夢多からん
向月胡笳誰喜聞 月に向かつて胡笳誰か聞くを喜ばん
岑参しんじん (七二五—七七〇) は唐の高官、願真卿は玄宗から德宗まで四代に仕えた忠臣。書の名手でも知られる。先に上野でその書の展示会があり健一さんが鑑賞された。線を引いた所は昭七さんの諳じられた節です。黄砂の季語と関係付けられたのです。昭七さんの想像力が天山山脈まで飛躍して成了た句。願真卿と結びついた所、隣の健一さんとも関係づけられたのは喜ばしい。採つてよかつた。こういうことがあるのが芸術のいいところです。

轟るや殻の内なるかたつむり

陽一

「この頃近所の森にオオタカが巣をかけており、観察

に行つて居ります」とのメールを頂きましたので、その時に出来た句でしよう。轟る声を聞きながら私は殻の内にじつとして時節を待つて居るかたつむりです、という心を暗喩しているのです。私はそのように鑑賞いたしました。すべからく自重して時の到るのを待つべきであるなどの一文を鷗外が渋江抽斎にパトスを持って書いていますが、どうかこの気持ちで明日を待つて下さい。

一句鑑賞

磯目健一

閑伽井より溢れて蝌蚪の水となる

宏之助

閑伽井は仏に捧げる水を汲む井戸だが、滾々と湧き出した水が細流となり、その水底にオタマジヤクシが群れている。諸仏供養の聖水が可憐な生類を育む利生水となつて居るのを目にして、これも靈験奇瑞の表れと敬虔な気持ちになる。

天山に風猛るらし黃砂飛ぶ

昭七

黄砂は、中国奥地ゴビ砂漠や黄土地帯の砂が春の季節風に舞上げられ、偏西風に乗つて東海の島国日本にまで飛来する。別名霾はい、蒙古風、胡沙とも。その胡沙襲来の日に、広漠たる大地を走る天山山脈から吹き下ろす烈風を想像し、西域やシルクロードに遙かな想いを馳せる。

沢庵にはりつく落花いただきぬ

みち

柳家小さんの十八番「長屋の花見」が思い浮かぶ。貧

乏長屋の連中が大家の指図のもと花見へ、酒は番茶、卵焼きは沢庵で代用し、なんとか花見気分になろうとする。酒に茶柱が立つ一方、「長屋中歯をくいしばる花見かな」の俳句まで捻る。風に乗つて沢庵に貼りつく花片を天惠の馳走として恭受してみせる。瘦せ我慢の風流である。

ゆさゆさと揺れ須臾にして花吹雪

高志

万朶の桜花が圧倒する量感で咲き誇つて居る。だがその美に陶酔する至福のときのなんという短さ!。思えばあつという間に散華である。まるで人生における青春のよう。鬼城に「ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな」の作があるが、この句には單なる叙景を超えた切情がある。

花見酒元号四つ間に合つて

幸一

大正に生まれ成人となつた昭和では、戦争に狩り出されて、明日をも知れぬ命だったが、なんとか平成へと生き延びた。今、間もなく令和と四度目の改元を迎えるようとしている。我ながらよくぞ生き抜いたものと、今年花見のときを迎えて、つづく思はずには居られない。

もつこうばら咲く派出所で道尋ね

敦子

「派出所」は、本署から離れた警察の詰め所のこと。現在の正式名称は「交番」である。不案内な地で交番に立ち寄つて行き先の道順を教えてもらつたのだが、見事

なつるバラの繁みと花に囲まれた交番は、いかにも片田舎の風情を漂わせて印象に残つた。きっと警官も質朴な良い人柄であったことだろう。

山門を銷し牡丹の香を封ず

宏之助

人里離れた無住の山寺。山門は閉じられ境内は森閑と静まりかえつてゐる。庫裡と本堂の脇の庭園には牡丹が美しく咲き芳しい香を放つてゐるが、訪れて愛でる人影とて無い。だが孤寺独特の静寂と荘嚴さが漂つてゐる。轟るや殻の内なるかたつむり

陽一

陽春、繁殖期を迎えた小鳥たちの縄張り、求愛の鳴き声で天地は満ちる。いっぽう変温動物のかたつむりは、寒さに弱く冬眠から覚めない。温度と湿度が高くなる梅雨期が繁殖期で、それまでは石の下や葉裏に潜み、殻の内に籠つてゐる。同じ春なのに生物界に見る陽と陰のコントラスト。象徴詩に通じる詩情の句である。

高志

てらてらと回転ドラム畠を塗る

機械化が進んだ現代農村の田打ちの光景である。以前は田植えの前に畠を補強するため農夫が鍬で田の泥土を掬つて畠を塗り固めたが、今や稻作農地の大規模化でトラクターが率く回転ドラムで畠を作り、塗り固める畠塗り機が活躍する時代となつた。早い速度で泥土を塗り重ねられる畠の表面は、いつとき春光に柔らかな泥の光沢

を帯びるが、間もなく乾いて固い土質となる。畠塗りが終わると田には水が張られ、田植えの季節を迎える。

三月号読後感

磯日健二

芭蕉のかるみ以後」が今回で連載も五十回目となり、七部集「冬の日」の「がらしの巻」が終わつた。當々とこまで注釈を重ねてきた熱心な研究心には敬服するばかりである。歌仙「がらしの巻」も進んで、荷今が「巾に木槿をはさむ琵琶打」と木槿の花を頭巾にかざす琵琶法師の風狂を現出してみせたのに対して、芭蕉はその景に無常の余情を覚え牛の追養供養へと連想を広げて、「テシの跡とぶらふ草の夕ぐれに」と付ける。この付け句の評釈がユニークなので特に取り上げてみたい。幼時自分の遊び場としていた、生家近くの牛塚を思い出し、それが牛の墓であつたことに改めて気づく。この芭蕉の付け句の背景に、牛をことさら愛した室町時代の連歌師肖柏の存在があることは、すでに先人が指摘しているが、その肖柏との機縁がほかならぬ主宰にあつた。芭蕉が憧れていた肖柏の歌碑が旧友綾女さんが住む池田市の大廣寺にあつて、綾女さんの案内で歌碑を実見していたのだ。脳裏の牛塚と、肖柏の歌碑、そして芭蕉の付け句と三者が有機的に結びついて、この付け句の評釈、結像してゆくプロセスがなかなか興味深い。池田市といえば芭蕉に莊子を講じた儒者・漢詩人田中桐江の終焉の地で、

その意味でも芭蕉と有縁の地である。連歌史との因縁淺からぬ地なのだ。肖柏は、師の宗祇から伊勢物語の伝授を受け、聞き書「肖聞抄」を残した。宗祇は連歌の最高傑作「無瀬三吟」でも有名な傑出した大連歌師である。芭蕉は笈の小文で、西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫道するものは「なり」と書き、また宗祇の「世にふるもさらに時雨の宿りかな」を踏まえて、世にふるもさらに宗祇の宿りかな」と宗祇へ熱いオマージュを捧げている。宗祇は、それほど芭蕉に影響を与える存在だった。」のよう、巨匠の付け句「うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに」一句を対象に、俳諧史と自身の個人史とを重ねながら、詩と眞実に迫つてゆく注釈は、じつにユニークだ。博搜過ぎて一見雑記風だが、個々の相関と背後の意味の考察も怠らず本筋を外すことはない。多年の蘊蓄が光っている。主宰は多年実学の科学者として過ぎてきただが、主宰はその弊を免れて、豊かなパトス(情念)の持ち主である。備後神辺で同郷の菅茶山や井伏鱒二、木下夕爾に連なる文人肌の士である。しかも古典や俳壇ばかりでなく三島由紀夫・ドナルド・キーなど現代文学にも関心を寄せ、文化情報へも廣く目を配っている。毎号の俳窓評論纂の意欲的な要約・紹介は示唆に富み、毎号愛読している。

優れた自然科学者は、常に深いパトスを抱懐する。情念の世界の実存を認め、人生における意義を十全に覺知している。パトスは詩情の源泉である。エトスとパトスといえば、中国古典の碩学吉川幸次郎が江戸時代の代表的儒者を論じて、伊藤仁斎はエトスつまり理念の人、それに対し荻生徂徠はパトスもエトスも兼備し、その漢詩は素晴らしいと評している。理性だけでは駄目、情念を解しなければ詩は作れないというのである。徂徠は、田中桐江と親交深い間柄で、互に認め合う詩友でもあった。茶山は頼山陽の師であり、古文辞派徂徠は国文学者本居宣長とも同時代で古典解釈の方法論は近く、パトスを重視した。いずれも主宰の敬慕する存在である。俳句は他の詩型と同じく、パトスの世界に属するものである。詩の世界は、広漠たる大河のように古代より現代へ流れている。その文学史をさながら曼荼羅図を見るように視野に收めつつ芭蕉の目指した軽みの境地の到達点を探る主宰の意欲と健脚ぶりに、同伴者として心から拍手をおくりたい。

俳窓評論纂

*はなぐり塚：かつてわが国の農村では、牛を飼い、田畠の耕作の労役等に使用していた。牛は家族の一員のように大切に育てられた。その際、牛の鼻に穴を穿ち、鼻

輪（鼻環、鼻ぐり）をはめ、それに縄を結んで使役していました。やがて牛は飼い主の手をはなれて売りに出され、解体されて肉となり皮となりその最期を迎えます。牛はその一生のすべてを人間のために尽くしてきたといえます。こうした牛の大恩に報いるため、死後残された鼻輪を牛の唯一の形見として集めて淨祭することを福田海開祖中山通幽師が発願された。篤信の方々の力により全国から鼻輪は収集され、現在もその事業は続いているとか。鼻ぐり塚はもと円墳であり、その墳丘上に鼻輪を積んでいる。石室内には真鍮製の鼻輪を溶かして作った阿弥陀の宝号を刻印した金属板が安置されている。また、正面には馬頭観世音菩薩を祀っている。昭和初年に塚が建立されて以来、現在までにおさめられた鼻輪の数は六百八十万を超えて、現在も畜類供養のため、春秋二回畜魂祭を行つており、年間数万個の鼻輪が塚におさめられているとか。以上岡山の福田会のブログから引用した。冬の日の芭蕉の付句評を健一さんが先述のようになじめられたので、ここに牛の追善供養の鼻ぐり塚が今もあることを紹介しました。この間比叡山にお詣りしたらこの福田海の奉納牛塚が座つていまして合点がいきました。私の幼少時代によく遊んだ墓石とは打つて変わって、牛の石像でありまして、台座に、年々屠殺の牛魂追福のためな

り、と刻まれてありました。牛に積んで不滅の法灯のための菜種油を奉納されたことも書いてありました。「蚤虱馬の尿する枕もと」の芭蕉の句もしみじみとした感慨が潜んでいると思います。

*根本さんから送られて来た杉江松恋・藤田香織共著の「東海道でしよう」をざつと読みました。日本橋から三条大橋まで 492 km を二年半かけて歩いた記録。現代の東海道中膝栗毛ですね。実体験の文章はそれだけで読みやすく安心して作者の心中に入れるのが嬉しい。東海道の私の知る範囲でコメントいたしましよう。古い文献では伊勢物語、更級日記、山家集が東海道を通っています。東関紀行、十六夜日記は中世ですが、後の芭蕉も触れています。十返舎一九の東海道中膝栗毛が成ったのは近世後半 19 世紀初めですからつい最近という感じがします。なんと言つても私は芭蕉が何回も東海道を歩いて行つたり来たり往還というのですか、現代の我々以上に歩いています。これだけでも感嘆の他はないのですが、誰をも追随を許さぬような文芸作品を残しているのは珍存じでしよう。昭和五三年に山本健吉氏が東海道と芭蕉の風雅という名文を書かれています。その中に出でてくる宿場はお二人は全部歩かれています。現代の東海道という意味はそれだけでも面白いということです。私も部分的では

ありますが歩いたことがあります。無論吟行目的でしたが、品川、箱根、金谷、菊川、小夜の中山、御油、赤坂、大津、三条とかを思い出します。今太極拳の師匠格の二川さんは、いつも東海道の33番目の宿、二川と同じだよと云つて自己紹介されますが、私は行つたことがありません。金谷の石畳は大井川鐵道からの帰りに寄つたりして二回歩きました。あの石畳は一番歩きにくく憎らしげに書かれてその写真も載せられています。同感々々です。私は途中の茶畠に入つて吟行して氣を紛らわせました。確か上りきつた茶畠の道脇に芭蕉の句碑が立つていましたね。何故か小夜の中山で詠んだ「馬に寝て残夢残月茶の煙」の推敲句が刻んでありました。ここで本を開いたら藤枝が出てきました。前日健二さんから藤枝の話を聞いたのだが何の関連であつたのか忘れた。最近メモでもしておかないとすぐ忘れてしまう。この調子で著書の紹介をしていると切りがないので止めます。著者には悪いかも知れませんが、芭蕉の言葉を伝えた土芳の三冊子にある言葉が今は痛切に響きます。「又、旅、東海道の一筋もしらぬ人、風雅に覺束なしとも云えりと有」こう書かれています。又その前々の文章に「詩哥連俳はともに風雅也。上三のものは余す所もその余す所まで、俳は至らずと云う所なし。花に鳴鶯も、餅に糞する縁の

先と、まだ正月もおかしきこの比を見とめ、又、水に住む蛙も、古池にとび込む水の音といひはなして、草にされたる中より蛙のはひる響に、俳諧を聞付たり、見るに有。間に有。作者感るや句と成る所は、「俳諧の誠也」最初の方の言葉は山本健吉さんの図書でわかりやすく解説されています。何回もの往来に東海道の人情・風情が身にしみた芭蕉の実感でしよう。そのような経験もなく、従つて知識もない者は、結局正風の俳諧の扱い手としては資格を欠く者で、共に風雅をも人生をも語るに足らぬのである。書物で得た知識でそれを補うことは出来ない。それは生きた知識であり、あらゆる人たちの生活感情の微妙な隈々まで、分け入つて取得している人生知識なのであった。こう健吉さんは結論されています。私は芭蕉はそういう知識を開陳することなくほとんど省略して連句の付句をなし、捌きをしていること驚嘆の他ない。野ざらし紀行の短い文章と俳句の置かれた背景に膨大な歌枕の世界、日本史の背景を持つていてこと、そこから立のぼるもののはれ、人のかなしさが我々の胸を打つのである。切りがないので芭蕉の軽み以後で書き継いでいきたいと思っています。このような思いを起こしてくられたこの現代本に感謝いたします。

野ざらし紀行の末尾には漢学者山口素堂のあとがきがついている。素堂は本稿の(22)にて紹介したが、芭蕉とほぼ同い年であり、延宝三年江戸下向中の西山宗因を迎えての両吟二百韻を「江戸両吟集」としてまた二年後、芭蕉、京の信徳との三吟三百韻を「江戸三吟」として刊行、さらに幽山主催の「江戸八百韻」にも参加し江戸談林の推進者であった。そういう古い付き合いの俳友であった。盟友と言つてもいい。野ざらし紀行の濁子本にも跋を書いたが、その冒頭に「こがねは人の求めなれど、求むれば心静かならず。色は人の好む物から、このめば身をあやまつ。たゞ、心の友とかたりなぐさむよりたのしきへなし。こゝに隠士あり、其名を芭蕉とよぶ。ばせをはをのれをしる友にして、十暑市中に風月をかたり、三霜江上の幽居を訪ぶ」云々と自ら書いたような親友であつた。素堂のあとがきは短いけれども、句の勘所を短評して紀行文の芭蕉の本意を理解した者のみが書きうる芭風のありかを指摘していると思うので、これを足がかりに野ざらし紀行の一部を考察してみる。初めの方は「そもそも野ざらしの風ハ、出たつあしもとに千里のおもひをいだくや、きくひとぞさへぞ、そぞろ寒げ也。次に不一を

見ぬ日ぞ面白きと詠じけるは、見るに猶風興まされるものをや。富士川の捨子ハ惻隱の心見えける。」という具合である。そして中程に「わたゆみを琵琶になぐさみ、竹四五本の嵐かなと隠家によせける。此両句をとりわけ世人もてはやしけるとなり。しかれ共、山路きてのすみれ、道ばたのむくげこそ、此吟行の秀逸なるべけれ。」と言いつついるところ、私は前々から注目していた。その句は、山路来て何やらゆかしすみれ草、と道のべの木槿は馬にくはれけりである。また後の方では「洛陽に至り、三井氏秋風子の梅林をたづね、きのふや靄をぬすまれしと、西湖にすむ人の靄を子とし、梅を妻とせしことをおもひよせしこそ、すみれ・むくげの句のしもにたゞんことかたかるべし」と「梅白し昨日ふや靄を盗まれし」の句もすみれ・むくげの句の下にみるのは難しいと書いている。そこでみれ・すみれ・むくげの句に触れる前にこの素堂の文の意味を確かめておく。三井秋風は三井家の家系をひく富豪の生まれで、当時御池通の本店のほか、江戸店二軒、千貫余の家督を受け豪奢を極めた。凡兆日記に秋風庵と題して面白く紹介されている。「抑この三井秋風は三都に名高き巨富にして、本家は伊勢の松坂也。榮耀にあまりたる風流の隠者にして、その栄花をはなれて今はわびしき隠者也」と云事にて、自ら爰に隠亭を構へし故、

物さびたる秋風庵と称たり。」この続きに、この秋風庵の座敷の内装などの驕奢な様や間取りなど事細かく書かれている。湯屋は男女をわかつて三カ所とか本座敷二間の上は屋根を低くし、其の余は屋根の高さ三間にして四方を見晴し、一間の上はすべて三階作りにし、上下ともに物音の聞へざるやうにし、春は嵐山の花を臥ながら詠め、夏秋は月を心の儘見るやうにと、桂川を眼下に見卸し、本宅をはなれて、東柿の木の間、見めぐりして、此間五六間ばかりして茶室あり云々と。私は源氏物語の六条院に及ばないとも、秀吉の聚楽第のような展望室があつたと想像した。しかしこれも芭蕉の來訪前年の桂川の船遊び最中に台風に遭い、家に逃げ帰つたが、数百株の柿の木から青柿が落ちる音が数万の石礫を打つ如くで招かれた茶師などはあわて惑い、中に秋風の愛妾は一七才であったが積聚つよき女であつたために目を回して嘔吐し忽ち氣絶してしまい、皆が裸足で座敷に駆け上がりどこもかしこも泥まみれになり、金銀をちりばめたる隠宅は一ノ谷内裏の逆落としの兵とも入り込んだる騒ぎもかくやありけんと思われる有様となつた。お抱えの医師もきて妾の治療をして夜の明け方にはなんとか人心つきたる。卯の花頃の事であったので、四五日雨風打続き世上静か成らざれば、妻の心日々穏やかならず、例の妾、日夜恐

怖心で心静かならず、主の秋風は座敷の柿の木を八九本切り倒したけれど、隣の座敷の柿の木が倒れかかってそれを切り倒したけれど、隣家はうんと言わぬ。此嵯峨は柿と竹との名産地にて庄屋に切り倒す事を願い出たがそれも叶わぬ。その柿が落ちる度に妾が疝氣を起し気分すぐれねば今年ばかりか来年もかく騒がしき目に逢わんかと、妾の心落ち着かざれば、この辺の幽居もなりがたしとぞんじつき家の子引連れてそこここを見て回つて鳴滝に土地を見立て、又地を一力所買ひ取り、日ならずして作事にとりかかり、番匠五十人かけ、四十日ばかりに又秋風庵をぞ鳴滝にしつらえたる。さしも金銀をちりばめし隠亭を愛妾一人におぼれて惜しげもなくちり芥と引払いまた大金をもて鳴滝に引き移りけり、と書かれている。ついついこの文章の中身が面白いので長い引用となつた。この凡兆日記は僧文曉（一七三五～一八一六）の偽書とかユーモアがあるので、これを掲載した目黒野鳥氏が年月を修正して抜き書きしたと注されてある。それを私なりに要約してここに書いた。別な文献によるところの夏秋風は子供を亡くして喪中であつたらしく、そこへ芭蕉が訪ねて半月ばかり滞在したのであつた。奈良東大寺の二月堂の修二会に参じて二月末には入京して「京にのぼりて、三井秋風が鳴滝の山家をとふ」となる。そして

梅林

梅白し昨日ふや靄を盜れし
櫻の木の花にかまはぬ姿かな

伏見西岸寺任口上人に逢て

吾がきぬにふしみの桃の雲せよ

の三句が並び、次に大津に出る道、山路をこえて「山路來て何やらゆかしすみれ草」がある。素堂がこの句にも劣らないとした梅白しの句の意味は、梅の咲き匂う秋風の立派な山荘の庭園には必ず鶴がいると思つてきてみたのに、おや鶴がいませんね。とすると、これは昨日盗まれちゃつたじやないんですか。中国宋代の陰士林和靖

りんなせい（九六七—一〇一八）は梅林に住んで梅を妻とし、鶴を子として生活していたという。三井秋風を林和靖になぞらえて、その山荘には梅林があり鶴がいると想定しての発句である。これに付けた秋風の脇句は紀行文には書かれていないが、

ユーモラスで答えているではないか。先に冬の日の挙句にて白氏文集の傷宅のほのめかし（allusion）句を評釈したが、芭蕉は奈良からこの豪華な隱居に迎えられて挨拶した心にそのような詩想を殺しての梅白しの句ではないだろうか。山路のすみれの句にしても道の辺のむくげの句にしても尾形伊氏の解説する木下長嘯子の挙句集の引用（quotation）もあるかも知れないが、実作者としての芭蕉が眼前賞美の対象としてのすみれ・むくげではなからうか。物の見えたる光なのではなかろうか。静かに観れば物皆自得の蓑虫説跋文は鹿島詣から帰着した貞寧四年秋のことであるから、これから二年あとのことである。この辺をじっくり見ていきたい。

受贈誌（平31年4月号）

花冷えやにぶく光れる釣かくし（東京クラブ）

今年又野島崎へとづばくらめ（〃）

縄張りを娘に残す安房の海女（〃）

原宿の街ふくらます春休み（〃）

荒波に采螺の角の良く伸びる（〃）

お便り広場（到着順、敬称略）

先日は『PCエキスパート社』紹介して頂き、何とかい

う部品を交換してもらつてデータも失わず復元し、ほつ

秋風

杉菜に身擦する牛二ツ馬一ツ

である。そんな大層な鶴などいませんが、それより、杉菜草に体を擦り付けている牛が二頭、馬が一頭ならいますがねの意。かたみにユーモラスな気分を込めた挨拶に

万世遊
〃 栄 〃

としました。御蔭さまで誠に有難うございました。さてそこまでは良かつたけれど、わが版画作品の一覧表を作る必要があり俳句の前にそれをやつていたところ、2日も掛けて作つていたエクセルの表が、何の具合やら白紙になつていまい、またそのエキスパートさんに電話で聞いたところ、時々「上書き」するだけでは駄目で、「別名で保存」するべきだとのこと、また初めからやり直して居ります。俳句のほうは手につかず、アナログ人間にとつてコンピュータは曲者です。気分治しに今朝は好天気だったから近くの森まで散歩したら、ヨゲラとオオタカに出会いました。「梢廻る大鷹白き羽裏見せ」「大鷹の鋭き形態よ老の醉歩」などと。みちさんのカワニナは良かっただすね。また動いていますか。それではまた。

(317 陽一)

早々に二月号の送付ありがとうございました。隅々まで愛読しました。比叡山・近江路吟行の各句も良かつたです。特に「梅花藻の上の漣ゆらぎおり」の澄明な観察、「穴太積背にして地蔵桜供花」の具象。「さんみやくさんみやくさんぽだい」が仮の悟りを意味サンスクリット語で心経にも漢訳で出てくることは事典で分かりました。源氏物語講義で会つたとき、是非教えてください。

(324 健二)

高志様 本日お手紙をいただきました。小生の不用意な手紙が、ご夫妻にご心配をおかけしたようで大変申し訳ありません。貴誌購読を中止するにあたつて、メールでは失礼かと思い手紙にしたのですが、かえつて強い印象になつてしまつたようです。決して否定的な感情ではありませんので、容赦ください。句集を返却するかとのお問い合わせですが、どうぞお納めください。小生も1冊持っていますので、返却いただきても困りますので。

(中原氏とご面識がおありの増田さん?) にお見せされればとも思います。) というわけで、またの機会までお休みさせてください。奥様ともよしくお伝えください。(327 興正) 拝啓白金霞96号受け取りながら失礼しています。組内の同年代の方のご不幸があり、ちょっと忙しくしておりました。お変わりありませんか? 私は元気です。暖かくなつて畠の手入れにちょっと疲れぎみ、彼岸過ぎても墓参りもまだです。平成もあとわずかです。ゆつくりいきませう。木蓮にひかれて歩く遠回り

(328 健三)

早速にご丁寧なお手紙有難うございました。句会報まで頂き感謝です。私事ですが趣味の囲碁仲間に誘われて真似事で幾つか作つてみた所散々な評価ではじめに勉強してみようかな?が現況です。そんな折り土屋さんからお話を伺い懐かしさの余りお手紙しました。光成さんの

お手紙の中で「私と俳句の話をした事がある」とあります。私が記憶にあります。「だからそれがどうしたと言ったことか?」だつたと思います。今から思うと随分失礼な言葉でした。ずっと気にしていました。十数年前のことですが当時の未熟さを恥じ心からお詫びしたいと思います。投句のお話を頂きましたがそんな訳で今は勉強が先きと思っています。会報にある皆様の作品は深みや品格がありとても勉強になります。お見せできるような句ができ機会がありましたら宜しくお願ひいたします。

お手紙にありました成瀬さんの俳句の師系とのことです。が「矢島恵」さんという女性の方だそうです。成瀬さんからは毎月の句会の様子(評価)をお手紙で教えてもらっています。大変参考になつております。小山さんにはここ二年ぐらい「無沙汰していますが、暖かくなつたら又高澤利親さんとお訪ねしてみたいと思つています。同封の書籍は私の娘の夫が著したものです。ご笑納ください。これからもお元気で活躍されることをお祈りしています。

(4.6 根本大治

(身籠るとき透けてくる目高かな(恵)さくらの夜不意に蛇口が水こぼす(宮坂静生)のような句が佳句と思います。宮坂氏は藤田湘子の鷹の同人であられた。その前は富安風生に師事したとありますから、小山さんのお父様と同じです。恵さんは今はイメージ重

視の現代俳句協会に属しておられるようです。頂いた本の書評を前項に書きましてお礼に代えます。)

桜の辺りは強風の中染井吉野は色こそ白っぽくなりましたが、まだキレイです。山桜はすぐに散ってしまいます。今は赤と云うか茶のやわらかそうな葉が出ています。八重桜は見に行つてませんが、そろくぼつてり色濃い花が咲くことでしょう。我孫子の自然は春の植物や水でさぞや見応えがありかと存じます。先日延暦寺の一笔箋と足弱用手作り草履のストラップのおみやげ嬉しく頂戴いたしました。大切にいたします。遠くまでお出かけ多くお疲れのところただごくありがたく存じます。旅の秘訣の一つに「おみやげ買うな」があります。ダレソレにおみやげと考えるは旅の負担になり精神衛生上も財政上も好ましくありません。なので、旅吟で大満足でありますからおみやげはどうぞ放念下さいませ。今過日頂いた自然教育園の一年を眺め四月の花々と蝶をこの頃つて白いものが多いのかしらと昨年の十二月に頂いたころは赤が多いのに、季節つてほんとにいろんな顔を見せてくれますね。一度お伺いしたいと思っておりましたが、誌上で私が見落としたかと存じますが、十周年記念誌発行基金の件お知らせ下されば幸でございます。平成二十八年五月が五周年、十周年はあつと云う間なのですね。そ

これまで生き延びるかも。お体お大切に頑張つて下さいませ。
（ごきげんよう。）

（4.9 璃子）

最近、思い切つて電動自転車を買いました。老いて脚力が落ち、ペダルを漕ぐのが難儀になつてきました。乗つてみると、あらためてその利便さに驚きました。まるで後ろから押してくれるようになつて、これまで降りて上つていた坂も、乗つたまま樂々と上るのですから嬉しいなります。そこで考へたのは、毎月の会誌制作での主宰の御苦労です。それは普通自転車で坂道を上る苦労に似ている気がします。助けてくれる電動モーターのようなものがあれば、随分と負担も軽くなるに違ひありません。制作の難儀さの一つに文字原稿のデジタル入稿があると思います。私はパソコンの入稿にはいささか自信があり、さほど苦にもしていません。もし主宰に依頼されば、喜んで一臂の力をかすを惜しみません。私の入力代行が、パソコンが苦手な会員に寄稿の道を開くことに役立つなら本望です。多数の寄稿は次の五年誌の豊饒さにもつながります。甚だ差し出がましい申し出ですが、伴走者からのささやかな希望として、どうか御一考ください。

（4.14 健二）

（嬉しいお申し出謹んでお受けいたします。どうかご助力下さい。）
今年の桜は悲しみを含んだ花びらです。が、元気を出

して草花々だった畠を開墾しています。家族が大好きなピーナッツを植えるという欲を湧いてこさせる気持ちに移行させています。亡き親友のご主人を励まして来ましたが力つき奥さんのもとへ逝かれたむなしさを何とかしてたがて。三月の一ヶ月間お手伝いしましたが。いっぱいの感情を経験しながら時が過ぎてゆくのでしょうか。ボーリとしないで暮らさなくては。六月一・二十三日戸手高の同窓会には出席の予定です。心模様をうたわれた冊子のお札が遅れましてすみません。有難うございました。お元気で。

（4.15 綾女）

平成に変わった時今回の令和のような大サワギは無かつたように思います。個人的には令和は好きではあります。ともあれ平成最後の東京クラブ会報をお届けいたします。一歩踏み込んでこうした方が良いのではと思う皆様の句もありますが互選で楽しんでいる句会なので「ほめ」に廻っております。NHKの天気予報では「冬モノ」をしまって大丈夫とのお告げでしたが、今しばらくそうは云つても思つております。（健二）

（4.17 璃子）

今年の桜は肌寒い日々が続き、雨が少なく長く楽しむことができましたが、千葉では如何でしたか。今の時節、山野の若葉が美しく感じています。お元気でしょうか。白金霞三月号有難うございました。いつも多くの方の俳

句を読ませていただき、感謝しています。とりあえずお礼申し上げます。もう少し寒さが続きそうです。ご自愛ください。PS返信の遅滞をお許しください。

(4.19昇)

我孫子日記

3/15	例会
3/17	新宿
*	彼岸会
3/21	会
*2	彼岸会
3/22	文学館
*3	花見
3/27	花祭り
*4	花見
3/31	花見
*5	花見
4/5	花見
*6	花見
4/8	青戸
*7	SOA
4/10	SOA
*8	花見
4/13	新宿
4/15	北総病院
*9	北総病院
4/17	SOA
4/19	例会

- *6 青ぬたに落花一片付着せり
大桜視野に納まるまで退る (みち)
たんぽぽや手賀沼眼下丘の上
強風を孕み遅れて花吹雪

- *7 廃美容室窓に雲南素馨咲く
*8 草のある岸にかたまる花筏
鳶の長鳴き聞こゆ花の土手
水に浸かる枝にとじまる花筏 (みち)

- *9 木下万葉公園貝殻層の裾青む
編集後記：新聞にピンクレディのみいさんが写真付きで載つていて懐かしかった。彼女還暦を越えているとか、今は尿漏れ吸水ショーツのCMに出演しているとか。懐かしいとは、デズニーランド周りのホテル群の最初に出来たホテルの設計の応援で私の液状化対策仕様が県で採用されて右へ倣えで皆同じ仕様の基礎になつてていると聞いた。そのホテルのオープンに招待されて行つてみたら、みいさんが舞台で歌い終ると私の前に飛び降りた。これにはびっくりしたが、握手したんですよ。その時彼女は二七才だったと今知ったのです。だいぶ書き過ぎちゃった。反省！

- *5 花桃の白き花咲ぐ天王寺
しだれ桜手押しポンプをその中に (みち)
桜咲き繰り上げ修す灌仏会